

傳が呼んで来やせう七郎「ハイ、下郎叩へらう康之「コリヤ、叱る  
 あ捨置け、サア下郎速く呼んで參れ傳助「ヘエ、宜しうございま  
 す、吾傳が知つて居りやす、浪人を直ぐ呼んで參ります」と  
 二人は其儘邸を飛び出し、一ツ目の四ツ角まで来ると、ホット  
 思をつき傳助「オイ辨藏、浪人者を呼んで来ると言つて飛び出し  
 はが、一体何處へ行く心算だ辨藏傳助、汝が知つて居るように  
 言つたが知らねわのか傳助「さうよ、乃公は汝が知つて居るだらう  
 と思つて居たからさう言つたのだ辨藏「オイ戯談ぢやアねわで、  
 乃公は何んにも知らねわ傳助「さうか、それは何うも困つた、此  
 儘知らんと言つて歸つたから主を偽つた不埒せ奴と、何んかに  
 お叱りを蒙るかも知れねわ、何うしたもんだらう」と二人は往  
 來の立話しをして居ると、其向ふ角の吉床の親方が吉床「ヤア傳  
 助さんに辨藏さん、お前さん等は何を話して居るさるんだ二人「  
 オイ吉さんか吉床「ヤア内へお這入りあさい二人「ぢやア、暫らく

休まして貰をう」と内へ這入つて来ると、七八人の客が願番を  
 待つて居る吉床「時に傳助辨藏さん、久しく合ひませんが何處か  
 のお旗下かお大名へ、御奉公をあすつたのですか二人「旗下や大  
 名ぢやアねへ、大した處へ御奉公に有り付いたのだ吉床「何處へ  
 御奉公あすつたのです二人「オオ、懼りあがらポンくあがら當  
 時本所二ツ目に新たにお邸お出來た、松平康之助様のお邸へ御  
 奉公をしたのだ吉床「それは強氣だ、シテ今何を話して居たんだ  
 二人「若君康之助様は劍術は日光山の奥にて、天狗に授つた日本  
 一だが、それに少しも御慢心あさらず、劍術はかあらず上に上  
 が有るものだ、よつて浪人者を呼んで尙も武術の御修行がして  
 見たい、早やく劍術心得の有る浪人者を呼んで来ひと仰しやつ  
 たから、ヘエ合点と二人が飛び出したが、何處へ往つて宜いや  
 ら判らねわから、二人が話して居たんだ吉床「ぢやアお邸へ浪人  
 者を集めるには及ばねわ、御府内の町道場をお廻りあすつたら

何うです二人、オイ、其様お事はお前に聞かすても判つて居る  
荷且にも前の公方様の御公達ださう言ふ怪敷事が出来るか」と  
話して居るを、願番待をして居る客の中に一人の浪人浪士コレ  
く下郎、些と尋ね度事が有る二人、ヤイ、素浪人、松平康之  
助様の御中間を下郎あぞと怪敷言ふを、汝は何國の何者だ浪士、  
フム大層意張る、拙者は九州の浪人澤田彌十郎と申す者で有る  
参つたら御立合下さるか中間身貧を浪人者で有らば、救けて遣  
らうといふ思召だから、御立合あさる彌十郎然らば明日参上いた  
して御手合を願ふ、何うか其由御付きの御家來へ御傳へ下され  
中間宜し承知した」と郎ち歸つて参り中間へエ、梁田様只今  
七郎何うした中間明日は云云斯様くで浪人者がドレ、と歩  
つて來やす七郎、ヤイ、何んで其様を馬鹿を言つた、倘左様  
お事がお上へ聞へては申し譯が相立たん康之、コリヤ梁田、渠等  
は無學の下郎ぢや……七郎御側付の吾々が、申し譯けがござい

ません康之如何様お事が有らうとも、其方等の落度にせん、下  
郎兩人に酒を飲して遣れ七郎ハ、ヤイ下郎お上より下さる御  
酒有難く頂戴せい兩人へエ、梁田様久須様、貴君方も御家來  
ら吾々も御家來だ七郎、ヤイ、不禮者奴……康之、コリヤ、下郎の  
申す事を一々咎めるを、下郎充分飲よ……兩人へエ、有難く頂  
ぎやす、そこで其夜は深夜まで御酒宴とある、借て夜が明ると  
傳助辨藏の二人は、御玄關に出て浪人の來るを待受けて居る、  
處へ一人の浪人が門外を徘徊あし、葵御紋に恐れ内には這入ら  
すウロくして居るを見たる、傳助辨藏は兩人、オヤ、其處に居  
あさるは、澤村様ぢやアねわか、何をウロくして居るんだ  
彌十郎餘りお館の御立派と、葵御紋に恐れて……兩人それは恐れ  
る時は恐れあくらやアあらねへ、暫らく待つて居る、御重役へ  
申し上げる」と中へ這入り兩人へエ、只今門前へ九州浪人澤村  
彌十郎と申す者が参りました、何うかお上へ御取成しを願ひま

「そこで梁田七郎、久須見藤四郎の兩人は、玄關に來り門外に居る、浪人澤村彌十郎を見るに、姿は見苦しき身扮をして居ますが、何處やらに人品骨柄卑賤からん者と見認めましたから兩人コレ、其許が九州浪人澤村彌十郎と申すか彌十ハ、九州の或諸侯に仕へたる者でございませうが、武術の修行をいたさんものと、漸々昨日御當地に來り彼れ是れ道場を搜ねて居りし處、豈に斗らんや昨日云云斯様くと承はりし故、浪人の身の程も知らず、御立合を願はんものと斯く推參仕つりましてございませう兩人其由御前へ申し上げる、暫らく其處に控へて居れ」と申し置き御前に來り兩人ハ、申し上げます、只今門外に澤村彌十郎と申す者が來り、云云斯様くと申し居ります、天晴なる武士と心得ますれば、何うかお目通りを仰せ付けられますよう康之、フム左様か、いまだ予は部屋住同様の身あれば、苦しうあいこれへ召伴れて參れ兩人ハ、畏まり奉つる」と再び玄

關に來り、兩士浪士澤村彌十郎、若君様お目通りを免されたればこれへ通れ……彌十ハ、ッ」と兩人に案内をさせて、遙か此方に平伏して居る兩士ハ、即ち九州の浪人、澤村彌十郎と申すは彼の者でございませう康之、コリヤ、澤村彌十郎とやら、予は松平康之助で有る、苦しうあい面を上げ彌十ハ、ッ」と頭を上げ見奉つるに、御身には葵御紋の附し黒羽二重の御衣服同お羽織に小刀を帶し給ひお梅の上に御着座遊ばして居らせられるは、前の將軍台徳院殿様の御公達にございませう、そこで澤村彌十郎は、恐れ入って控へて居る康之、コリヤ、其方は何流を學しや彌十ハ、鹿島神流を聊か學びましてございませう康之、然らば一應其方の手の公を見せ呉れよ彌十、未熟の手の内を御覽に入れませうは、恐れ入り奉つりませうが、御前のお慰みに御覽に入れます康之、フム、梁田七郎其方が敵手にあれ七郎ハ、畏まり奉つる」と早速身支度に及び竹刀を携へ、進んで出る康之、コリ

彌十郎、手が家來梁田七郎と試合を申し付ける、準備をいたせ彌十郎、御免んを蒙りお敵手にあります」と身支度に及び竹刀を拜借して、進み出で彌十郎御手軟かに願ひます」そこで竹刀を三寸の掛け違にして置いて、双方ジシと睨み合ッて居る内に、懸ての事にヤアッつと聲掛け立上り、ボン／＼パチツと打合ッて居るを、康之助様は御覧かされ康之「フム、これは却々出来る哩、逆も梁田は及ばぬ」と感心して見てござる、すると中間傳助辨藏の二人は、御様側に來り兩人オ、澤村様、遠慮しちや不可ねねよ藤四「コッヤ／＼」下郎、黙つて居れ兩人何久須見様、黙ッちや居られねね、吾儕等が周旋した浪人だ、敗けて呉れちや困りやす、此時双方烈しく打合ッて居ますが、動もすると梁田七郎が敗れるようござりますが、澤村彌十郎は、遠慮して立合ッて居ましたが、何思ひけん竹刀を投げ、一間半ばかり飛び下り彌十郎、恐れ入りました康之彌十郎、其方の手

の内は大抵相判ツた、此上は予が試合をいたす」と御座度の上試合にありましたが、彌十郎も康之助様の御手の内は、倍に天晴ある御手練でござりますから、到頭打敗れ入りました康之彌十郎、其方は急かぬ旅あれば、暫時予が邸に滞在いたせ彌十郎、有難き仕合せに存じます」と、御禮を申し上げて居る、折から戶外の方に、ワア／＼と俄に人聲がする、これは昨日傳助辨藏の兩人が、一ツ目の髪結床で話して居た事が聞へたから、諸所の町道場を開いて居る、浪人者が聞傳へ、松平康之助様のお目通りを願はんと、門前に來ましたが、恐れて御門内へはよう道入らずに、ウロ／＼して居る、傳助辨藏は中間「ヤイ、汝等は何者だ浪人ハ、吾々は御府内に町道場を開いて居る、何の某しと申す浪人者でござる中間「ちやア、遠慮なく中へ道入れ浪人ハ、只何んさかく恐れ入ッて中へは道入れません兩人宜し暫らく待つて居る」と言ひ置いて奥へ飛び込で來り

兩人、梁田様、今戸外に浪人者が集り來り、云々斯様くと申し  
 て居りやす、中へ入れませうか、七郎「ヤ、氏素性も知れぬ浪  
 人者を無暗に入れられるは、兩人、それでもモウ斯うあつたら仕方  
 がね、七郎「此事御上へ聞へては、何んとも申し様があい、  
 追ひ歸して丁へ、康之「イヤ、追ひ歸すには及ばん、早やく予  
 が目通りへ呼び出せ、七郎「いまだ身元も判らん浪人者を御目通り  
 とは餘りの事、殊には浪人者の中に如何ある者が居るやも相判  
 りません、康之「イヤ、苦しい予は我儘御免の身の上あれ  
 ば決して差支はない、コリヤ下郎浪人者をこれへ呼べ……兩人  
 ハ、ツ、と門外に來り、兩人「サア浪人者、御前の許しあれば此方  
 へ通れ、處が浪人者は、何れしても恐れ入つてよう遣入らず、  
 一人歸り二人歸りして皆立歸つて了ふ、そこで此事を御前へ申  
 し上げる、すると康之助は、康之「フム、逆も此儘にてはよう遣入  
 るまひ、此上は表へ、劍道指南の看板を出さう、七郎「それは餘り、

恐れ入ります、搜之「イヤ、苦しい、七郎「然し御前の御名前を  
 お出し遊ばしては、吾々兩名が何んとも申譯がございません  
 康之「然らば、梁田、其方の名前で出せば、差支へは有るまひ、いよ  
 々、集つた處で予が教へて遣らう、ソレ速く看板を取寄せ  
 康之「ハ、長まり奉つる」と早速、櫓の一間板を取寄せ、すると  
 康之助は筆を取つて、一劍術、鎗術、軍學の指南、但し武家町  
 人の差別なく入門差許す者也、梁田「七郎「信行と、瀧元流にて美  
 事に御認めにありました玉の井が教へて置いたのでございませ  
 されば、此看板を門外に出しますと、其翌日よりおのく浪人  
 者が試合を願ひに参ります、此者を一々道場へ通して御立合  
 あさる、康之助様は斯くして我儘の御遊興をあされ、御樂と  
 あつて居る、然るに其年暮れて翌寛永十六年三月とある、或日  
 康之助様は、康之「コレよ、梁田、久須見今日日は保養がた、何  
 處かへ見物に出ようと思ふ……七郎「ハ、好天氣でございませ

から、御散歩もお宜しうございます」と申し上げて居ると、傳  
助辨蔵の二人は二人へエ、御前へ申し上げます、丁度櫻の満開  
花の見頃でございます、向島を御見物あすて竹屋の渡しを涉ッ  
て、待乳山の聖天、山の宿より花川戸、矢大臣門を這入ッて淺  
草奥山、觀音の境内を抜けて、彼れより上野の方を御見物あさ  
いませ、吾儕が御案内をいたしませう七郎ヤイ下郎、また無益  
事を饒舌ナ康之、コソヤ下郎、其方等に案内を申し付ける中回ッ  
レ梁田様、何うです、其日は御忍びの御姿にて、梁田久須見、  
ても松平康之助様は、其日は御忍びの御姿にて、梁田久須見、  
中回傳平辨蔵を御供にお從へ遊ばして、木所ニツ目のお邸を御  
出ましにあり、御竹藏前を石原通り、吾妻橋を左りに見て小梅  
の枕橋を打渉り、漸々向島の堤防へ来て御覽あさると、櫻は満  
開にして掛茶屋が列んで有つて、老若男女が花見に来て居る中  
には、酒に酔て堤防の上を浮れ廻ッて居る、此状況を御覽遊ば

した松平康之助は康之、何んと面白ひ事ではあいか、兩士ハ、至  
極好御保養でございます、これより田中の稻荷へ御參詣、借て  
此田中の稻荷と申します、方今の御園り稻荷の事でござい  
ます、何故田中の稻荷が御園りと變ッたかと申します、  
祿年間に向島の界隈日照續きにて雨降らず、百姓の困難一方あ  
りません、それを其頃有名の俳諧師、寶井基角が田中の稻荷の  
神前にて、雨乞の祈禱をする時、夕立や田を御恵の神からで  
と讀だ此句の徳によつて雨が降り出しました、田を恵んで下さ  
れたと言ふので、御恵み稻荷と申します、それが、何つの世にか  
御園り稻荷と言ふ事にありました、されば康之助様主従は、田  
中の稻荷より牛や御前や長命寺と、彼方此方を御見物、する  
中回傳助辨蔵は中間へエ梁田久須見様、諸所を御歩行あすッた  
から、何處かへ這入ッて御支度をあすつたら何うです七郎ヤイ  
また食事を首ひ出したナア康之、コソヤ、梁田何處かへ這入ッて

休息をいたさう七郎ハ、と見やる傍へに武藏野と標したる、掛腰籠が掛つて有る、其茶店の奥へ這入つて来る、松平康之助様とは誰一人知る者はございませぬ、茶店の女は、お茶お菓子多葉粉盆を持来る、これから酒肴を誂らへ、主従が奥の方で酒盛りをして有る、處へ七八人の武士が、餘程酔可をして居ると見へて、一步は高く一步は低く、踏々跟々としながら歩つて参り、花見の婦人を捕へ巫山戯廻つて居る、婦人子供は、アレエッ、と逃げ廻るを、尙面白半分一人の婦人を引捕へ武士コリヤ婦人、何んにも其様に恐怖事はない、サア此方へ來ひ」と手を握り戯れて居る、處へホイ、と掛聲をして一挺の駕が歩つて参り、人足へエ、御免ん」と聲を掛け其前を往き過んとする、時に件の婦人は、婦人「アレエッ」と手を振り放し、バツと向へ突飛す、すると酒酔の武士は、跟踏つとすると途端に駕の棒で頭をコツンと打、人足「旦那、お危うございます、武士「ヤイ、駕尾、

武士たる者の頭へ駕の棒を當るとは不届か奴」と一刀の柄に手を掛ける人足「何うか御勘辨あすつて下さい、武士「イヤ、勘辨は相成らん、それへ直れ真二ツにいたす」と此時駕の中に居る客が、客「オイ、人足、何を愚圖くして居るんだ、そんな酒酔に敵手にあらぬで速く遣れ、武士「ヤイ、武士たる者を酒酔とは不埒か奴、サアこれへ出らう、客「オイ、出らうと言へば出て遣らう」と駕の垂を掲げて、それへズイと出たる、男は藍と紺との辨慶鳥の衣類に、博多の帯を神田に結び、手に白銀造りの一刀を携へ、客「旦那方、何か私に用が有るのですか、武士「オ、汝は只今吾々を酒酔と申したが、サアこれにて誤れ、客「何んで私が誤んですか、汝方等が僅少の酒に食ひ酔て、若見の婦人子供を捕へて亂妨、狼藉、武士として耻しい事ぢやねわか、さすがは汝方等が花見の人に誤りやアがれ、武士「ヤア此素町人、最早勘辨相成らん、ソレ、各々方此奴を殺て了いあさい、一同「オ、合點」と一同に揃

と一刀の鞘を拂ひ切つて掛る。客「フム、面白ひ」と同じく一刀の鞘を拂ふ。すると数多の花見の人が「〇ッリヤ、喧嘩だ」と右往左往に立騒ぐ。此時武藏野の奥で御酒を召飲つて居らせられたる、松平康之助は康之「コリヤ、大層外が騒しいが何うした七郎ハ、斯様く云々でございます。康之「フム左様か、然らば速く往つて其町人に加勢をして遣れ、ソレ傳助辨藏其方も往け」と御言葉が掛る。ハ、ツと應答て、梁田七郎、久須見藤四郎、傳助、辨藏の四人が往來へ駆け出だすといふ。サア此七人の武士を敵手に勝敗をする町人は、一体何者でございませうや申し上げたうはございするが、最早紙数の限りともありません。申し上りたうはございするが、これにて一段落といたして置きたから、悪狐退治の御話しは、これにて一段落といたして置きた。他「日改めまして、葉松平康之助と標題を下し、申し上げる。考へてございします、借て此後へは豫て御披露して置きましたる、中條兵庫之助の第四編「奥羽漫遊豪傑後の中條」を、口

演いたしますれば、何うか出版の際には相變らず、御愛讀あらん事を今より願つて置きます、エ……次に申上げておきますが此本の出版元樋口隆文館では、小説や雑誌類は申すまでも無く、其他理化算數地理歴史、諸工業家の参考書類や、鐵工石工土木建築、大工左官の雛形本、歐米諸國の語學辭典類や、和漢名家の法帖や畫譜、法律本や軍隊書、易占相學九星學、其他百般の書籍類を、何でも彼でも取り揃へてお安く買つて下さいますから、此段申しそへておきます、尙御注文又は御問合せの節は、往復はかさかさもあくば、三錢の切手を御封入願ひます、そして御住所氏名は成るべく楷書で明瞭に御認めを願ひます……

天下豪傑悪狐退治(終)





日書行發館文隆口樋

鈴山玉 木田秀 錦夫齋 東遠講 書記演	鈴天秋 木野月 錦三玉 泉郎光 泉遠講 書記演	鈴天秋 木野月 錦三玉 泉郎光 泉遠講 書記演	鈴天秋 木野月 錦三玉 泉郎光 泉遠講 書記演	鈴天秋 木野月 錦三玉 泉郎光 泉遠講 書記演	鈴天桐 木野野 錦三金 泉郎城 泉遠講 書記演	鈴天桐 木野野 錦三金 泉郎城 泉遠講 書記演
野州庚申山惡狐塚の由來	女龍神お玉	其後の薬師	後の薬師の梅吉	後の薬師の梅吉	後の山	山
●●●●● ●●●●● ●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●●●● ●●●●● ●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●●●● ●●●●● ●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●●●● ●●●●● ●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●●●● ●●●●● ●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●●●● ●●●●● ●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●●●● ●●●●● ●●●●● ●●●●● ●●●●●

候座御に申書計の行發版新と々類外の載記欄上

三は久安城復法て維は師のせ合同師及文社始也

明治四十一年 印刷  
十二月十五日



定價川五錢

郵税六錢

明治四十一年 發行  
十二月二十日

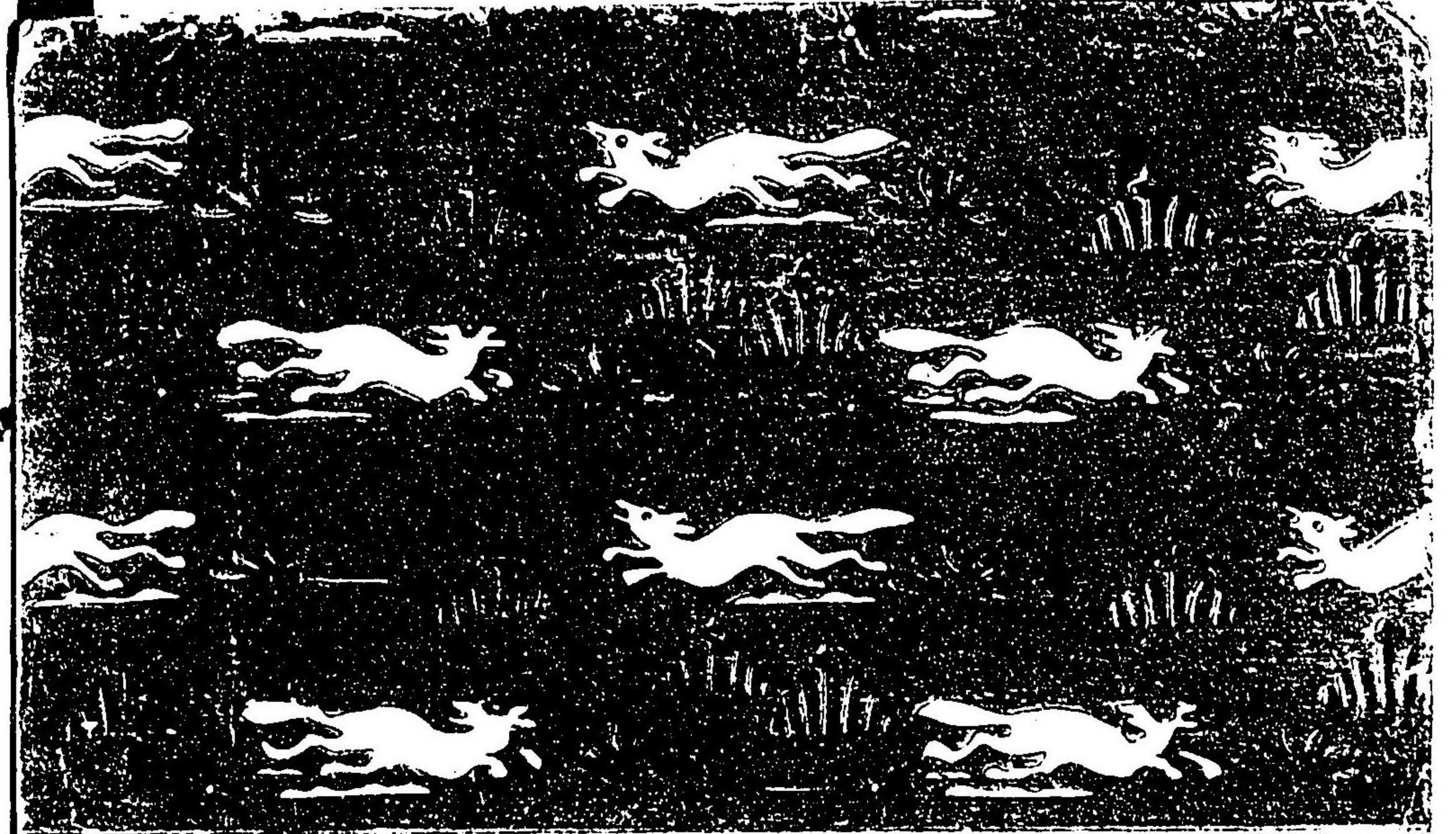
(治退狐惡傑豪下天)

講演者 玉田玉秀齋  
 發行所 樋口源次郎  
 印刷者 井下幸三郎  
 發賣所 大阪府南區三休橋邊谷南入  
 發賣所 樋口隆文館  
 發賣所 大阪府千日前港之御北へ入西側  
 發賣所 樋口晴輝堂  
 發賣所 名倉昭文館  
 發賣所 博多成象館  
 發賣所 岡本増進堂  
 發賣所 田村文春堂  
 發賣所 立川文成堂  
 發賣所 中川文祥堂

### 樋口隆文館發行書目

玉田玉秀齋 鈴山木唯夫 講速記演 泉速記演 大久保 左衛門 木曾漫遊記 實價三十五錢 郵稅六錢	玉田玉秀齋 鈴山木唯夫 講速記演 泉速記演 大久保 左衛門 東海道漫遊記 實價三十五錢 郵稅六錢	秋津洲櫻香 鈴山木唯夫 講速記演 泉速記演 怪談 不思議の家 實價三十五錢 郵稅六錢	玉田玉秀齋 鈴山木唯夫 講速記演 泉速記演 元和中 中條兵庫之助 實價三十五錢 郵稅六錢	玉田玉秀齋 鈴山木唯夫 講速記演 泉速記演 大久保 左衛門 中條武勇傳 實價三十五錢 郵稅六錢	玉田玉秀齋 鈴山木唯夫 講速記演 泉速記演 大久保 左衛門 中條兵庫旅日記 實價三十五錢 郵稅六錢
---	--	---	---	---	---

上欄記載の外の各種新行の計畫中にも御座候



通

上

隆文館

發行

